

目的 近年食分野における数値化理論の展開は食生活分析に新たな方法論をもたらしている。しかし摂取食品数による食生活分析の方法論は食品摂取量によるそれと比較してたらくられている。そこで今回小地域の食生活調査資料をもとに摂取食品数による食生活の数値的分析を試み若干の知見を得たので報告する。

方法 昭和54年7月に実施した福岡市西区元岡地域の専業農家主婦の食生活調査資料と分析の対象とした。摂取食品は3訂食品成分表によりコーディングを行い、食品数は3日間の平均値で表わした。統計分析の指標として個別データの栄養素摂取充足率と高屈率に基く食品群別充足率を用いた。まず食品数別にグループ分類を行い、属性検定によって食品数と栄養素摂取、食品群別摂取の関連を概念的に示した。さらに各データについて食品数と栄養素摂取、食品群別摂取の間の相関、回帰分析を行い、地域の食生活の規制因子となる栄養素およびこれに対応する食品数を推定した。

結果 食品数グループ間の比較ではカルシウム、ビタミンB₂と穀類エネルギー比に有意差がみられ、食品数の多いグループでは高い充足率を示した。食品群では果物類、乳類にのみ有意差が認められた。個別データの分析では食品群については食品数グループ間比較の結果に準じ、明確な関連は認めがたい。しかし食品数と栄養素の間ではカルシウム、ビタミンCを除いて有意の相関を示した。また回帰分析によって元岡地域の食品数推定に最も関与する栄養素はビタミンA ($Y = 3.97X - 5.32$, $r = 0.334$, $P < 0.01$)であり、これにより元岡地域における摂取すべき食品数のミニマムは26.5と推定された。